

かぐらおが

(題字は山田守英学長)

第 1 号

昭和49年9月1日

編集 旭川医科大学広報誌
編集委員会
発行 旭川医科大学学生課



完成した講義実習棟および体育館

内 容

広報誌の創刊にあたって……山田守英…2	体育館概要……………10
まんぼう遊学記……………丸子基夫…3	第21回北海道地区大学体育大会参加……………10
思い出すままに……………仲西忠之…4	昭和48年度・49年度入学者数調べ……………11
旭川医科大学談話会……………5	日本育英会および都道府県奨学生数調べ……………11
学則の改正とその解説……………5	学生団体設立状況……………11
大学の施設整備計画について……………7	課外活動用具の貸出について……………12
福利厚生施設概要……………9	昭和49年度授業料(後期分)の免除等の手続き…12



広報誌の創刊にあたって

学長 山田 守 英

旭川医科大学の広報誌「かぐらおか」が発刊されることになった。広報誌は、大学運営の過程で起った諸々の出来事、学生の厚生補導に関する凡ての問題、あるいは大学における教育や研究上の諸問題、更に大学の諸計画や方針などについて、正確な情報を提供して、大学人に周知せしめると共に大学人相互の理解を深める絆ともなり、更に進んで大学運営についての反省と批判や将来に対する建設的な意見などを自由に述べることのできる「広場」でもあると理解する。

周知のように旭川医科大学は昭和48年9月末設置され同年11月に第1期生を迎えて開校し、ようやくその歴史の第一歩を踏み出したばかりである。しかも建物の建設も組織機構の充実も、学年進行になっているので、今はその初期段階であって、完成までには更に若干の歳月を要する。従って今こそ重要な時期であって、大学人は一致協力して英知を結集し、目標を新しい医大建設の1点に絞って、将来悔いのない大学を建設しなければならないと思う。

凡そ大学はその時代と社会の要求によって設置されるものであるが、人類が繁栄し永続生存する限り、設置された大学も亦恐らく恒久的に存続維持される可能性がある。勿論大学は時代の推移と共にその外観や機構が変遷することは当然考えられるが、一旦建設されるとその根本的改革は極めて困難である。従って新しい医大を創設するに当たっては、既存の大学医学部が多年の経験から改革すべきであるとしながらも改革し得ないものを排し、古い殻を破った将来悔いのない医大を創り上げなければならない。

惟うに大学は学問の府として、常にその時代における学問の最尖端をゆき、真理の知的探究と創造をその使命とする。創造は単なる空想から生まれるものではなく、常に豊富な経験を基盤として、それらの吟味と反省によってこそ生まれ、いつもユニークなものでなければならない。

大学はまた同時に進歩した専門知識と技術の基本を授け、勝れた専門家を育成して社会へ送り出し、社会の要求に応えなければならない。特に医科系大学では、人命を取扱う医師を育成する場であるから、その教育過程において、医の倫理を基調とした人間形成のための徳育も欠くことのできない重要な教育である。

旭川医大建設の基本構想は、以上の大学理念を背景に、単科大学の特徴を生かして、従来の総合大学にみられる一般教育と専門教育の隔壁を取除き、両者を有機的に連けいして6年間一貫した楔形教育を行なうことにしたことである。その方法としては、一般教育の課程に専門教育特に基礎医学の一部を組入れる一方、一般教育学科目の一部を専門教育課程にまで延長挿入することである。また大学における専門教育は「生きた教育」でなければならないが、「生きた教育」は勝れた活発な研究者によってのみ達成される。この意味からも効率的な研究体制の確立が重要である。旭川医大では、各専門分野における研究者個人の自由発想による研究の発展を助長し、同時に分野領域を異にする研究者達が有機的に協力して、スケールの大きいユニークなプロジェクトテーマを打立て、その研究成果を挙げ得ることを期待して中央研究部を設け、共同利用の精密機器や設備を整えている。

他方旭川医大の附属病院は、地域社会の医療体系の一環として地域社会の保健、診療の実践に参画すると同時に、関連教育病院と共に学生の臨床教育指導の中核となり、更に卒業後医師の研究指導及び地域医師の再教育の場として、近代的病院構造と設備を整え、医療センターとしての建設がなされつつある。

新しい医科大学建設の初期にこの広報誌が創刊されることになったのは、時宜を得た極めて意義深いものと考えられる。新しい医大を建設するには、今後幾多の難関を突破しなければならないが、この広報誌「かぐらおか」が建設の針路を誤らないための1つの灯としての役割を果すことを衷心から希うものである。



まんぼう遊学記

丸子基夫

僕のドイツ遊学記は今後の留学生には殆ど役に立たないだろう。出発が19年前の今頃、渡航費として国は船賃しかくれず、お陰で仏客船による優雅で多彩で教育的な1か月の欧州接近を経験できた。同室のセイロン人技師との英会話では僕が聞き役だったが、ドイツへゆく韓国人林学生（私費留学なので4等室にいた）とは独語で共産主義・日韓併合・無教会キリスト教・朝鮮戦争・女友達などの事を心情的に歓談し合えた。焼肉の多いフランス料理メニューに早くもうんざりしたこと、余欠のためエジプト遺跡見学を諦めて仏新聞の日本関係記事を拾い読みするうち、左右両社会党の合同を知って快哉を叫んだら、傍の東大脳解剖学者が「そんな一時的政変は人類史の泡だ。万年単位で物を見なくちゃ。」とたしなめたのですこし論争したこと（この人とは今も文通がある）、船がサービスに一周したストロンボリ火山島の間欠大火山焔魂を奪われ、文明の歴史と等しく山岳・海洋の変貌に目を向ける大きな契機になったことなど、船中すでに語学と歴史の勉強が佳境に入ったのである。時間と私的余裕があればこそだ。

マルセイユーパリ東駅ーベルフォルをへて11月始め目的地Freiburgに降り、雨模様の駅前通りを歩き出した数分間の全身を包む感銘は今もなまなましく甦ってくる。雨雲がひくく垂れて枯葉が濡れた舗道に3枚4枚と散りしかれてゆく坂道をふと見上げれば、家並の向うに110mの大寺院本塔が赤砂岩のくすんだ肌を見せて凝然とそびえている。朝方のしっとり冷い小雨の中を、まずは自分が通うべき大学の姿を目におさめようと、聖地に向う巡礼者の如く神妙に敷石道をふみしめる魅せられたこの魂は、昨夜かいま見たシャンゼリゼの壮麗さも、ソルボンヌの構内で晩に焼きつけられた金髪美人もすっぱり記憶から消し去ったのである。

そもそも「初心忘るべからず」の修業訓は僕にとっては遅くやって来たもので（商業卒、北大工類、敗戦、文科転学）、作家業至難を認識して安易な語学教員の道に踏切ったのが25才。またドイツ留学の熱望を初めて点火したのは断じて文学的なものではなく、実に1953年末に来日したBASF会社の技師長S博士（ノーベル賞受賞者？）がラジオで全国に流した講演「アニリン染料の新合成法」の美しいドイツ語に他ならなかった。この化学講演の内容はもちろん僕には殆ど解らなかつたし、通訳されたかどうかとも記憶がない。唯それは全く「第九」のメロディであり、「アルルの女」の調べと同質のものだった。僕は日本一流の独仏語の先生に恵まれたし、それ迄にも少なからざる美妙なりートやシャンソンを憶えもしたのだが、話し言葉としてのドイツ語の響に髓の芯まで打たれたのはこれが初回だ。理由を推測するに、この時分はH. ヘツカ先生の文学講義と、お宅での茶話会に出

ることに精出したことがひとつ、S博士が稀な歯切れのよい発音と名文の才をもつ化学者であったことがひとつ、更にいえば僕自身に意外と科学論に感応する素質が具わっていたのかもしれない。それはともあれ、この時の感銘が僕のドイツ語への発奮の初心で、既に27才だった。「こんな素晴らしい言葉の話される国に独語教師の俺が行かないという話はない。」

遅いだけに激烈だった天啓は次々と僕を駆り立てて留学生試験を突破させ、SL修理や除雪技術の翻訳をうけ負わせ、印欧語変遷史と中世敘情詩論の講義に通わせ、帰国後も炭酸や製紙工場の通訳をやらせ、ゲーテ詩論を数篇書かせ、紋別の流水の報告を独訳させたりした。だが丸1年のフライブルク遊学中は講義に出るよりも、高校生・大学生の演ずる簡素ながら質の高い古典劇「エディプス」「イフィゲニア」にひどく感激したり、地元学生と共に車停めワグネルに出かけたり、仏米独の映画（すべて独語吹替え）を朝割引で見たり、路上の幼児や少女を写したり、人々と安酒を汲み交したりするのに費した時間の方が多かったし、カラヤンのモーツァルトを最前列で聞くのに大金を投じ、代りに3日間はVolksküche（≒Armenküche）での昼食と下宿での米味噌喰でがんばるなど、まさに独身者顔負けの遊学生だったと思う。けだし学問を深めに渡渉する人には参考になりえない由縁である。書物も買わずノートも大してとらず、ために独文学には今以て暗い次第だ。

割に若年で海外遊学をしたという驕りが折角の初心をだめにして、帰国後4年もたつと僕はさっぱり大作品に取組もうとせず、従って論文も世に問わず、まともな登山も社会活動もせず、紅燈の巷に沈湎して万事マンネリズムに走った。学問の方法を自ら確立しなかつた語学屋の陥る必然の末路である。産業界の経済アニマル主義は僕を偽アカダンに変えてしまったのだ。'68~70年、全大学は教養俗物性と専門盲目性を自らの下に曝され、とくに墮落しきっていた僕には「帝国主義大学教官！」なる糾問は真に痛切にこたえた。45才のKahlkopfは0から自分を構築しなければならぬ。

僕は学界に呈示できる研究成果をなんら持帰らなかつたので、主として留学意志の生じた契機を主観的につづり、おまけとしてその初心が錆びつき崩壊してゆく後日談を付け加えた。けだし最初と最後を見れば中間の1年の実体は凡そ想像がつく。僕には今、何か新しい初心が萌しつつあるらしいので、まず足腰を鍛えるべく山谷を辿り歩くのを第一と考えている。

[注] Freiburgには小児科の吉岡教授が2度も行かれたから、この古都の客観的な描写は同教授にお願い致したい。

(ドイツ語教授)



思い出すままに

仲 西 忠 之

聞くところによると、「官」という字は屋根の下に拘束されている人間の形象であるという。もとより大学を刑務所にたとえる気もちは毛頭ないが、文部教官という官職を拝命して、爾来15年この間拘束感がなかったと思ったら嘘になろう。

生来自由奔放な血が体内を流れているためであろう。肉体的にせよ、精神的にせよ、理不尽な天下りの強制拘束を私は極度に忌み嫌う。学生時代にしてからがそうであった。

昭和30年、私は福島医科大学に入学した。30年といえ、その年の3月第2次鳩山内閣が成立し、日ソ交渉が開始された。またこの年は、自民党が結成され、大企業優先の高度経済成長の第1歩が踏み出された年でもある。前年にはビキニで第1回の水爆実験が行なわれており、インドシナ休戦、ブルガーリンソ連首相の登場など、トピックスが連日紙上を賑わしていた。このような目まぐるしい外界の変化の所為もあって、さなきだに心が揺れるものを、当時私は抑うつ基底気分が強く、なにごとにも悲観的で、たえず厭世的であった。教科書的記載を拝借すれば、苦悩を高尚なものとし、苦悩する自分を価値ある者と感じていた。

私を憂うつにしたいま一つの理由に、父による精神的拘束があった。医大入学以前、私は文科系を志望していた。このことに父は現実的で、打算的な考えで反対し、医大進学を強要した。商家にそだった父は福沢諭吉の教えを金科玉条とし、「先生は庭には実の成る木を植えよと教えた」と誰彼なしに説諭するような、いわば風流韻事を排して、実利を優先するタイプであった。このような父と、当時芸術至上主義にかぶれていた私とでは意見が合う道理がない。当然の帰結として口論し、青二才の感傷主義と罵倒され、そして私は抵抗した。しかしこうして拙文に呻吟している自分を省みると、冷汗三斗の思いがない訳ではない。韻事を生活の糧とする職業につかず、医学の道に進んだことをむしろいまでは感謝している。今頃父は草葉の陰で苦笑しているに違いない。

とにかく紆余曲折はあったが、私は父の希望どおり医大に進学した。しかし清雅な寡黙を維持できるほど私の精神は成長していなかったし、反抗心は見戯的な行動として露呈していった。ここに東北地方の1消費都市福島を舞台とした私の放蕩無頼の生活が始まるのである。消費都市とはいえ、街にトリスパーが出現し始めた頃であ

る。ウイスキーシングル一杯40円、西部劇のガンマンよろしく、カウンターに10円玉を並べて呑んだり、またときには屋台の暖簾に首を突っ込んで粕取り焼酎を呑むこともあった。私はほとんど隔日紅灯の巷に足を入れ、浮生夢の若し、懽を為す幾何ぞとばかり呑んだ。そして酔った。しかし自虐的快感ばかりが残って、ここはいつもうつろであった。泥酔した翌日、二日酔い目目で眺めた下宿の天井をいまでも思い出すことができる。

さて、ここまで書いたところで、読者の多くは私のようないわば前科者が何故解剖学の教授になり得たか訝がるに違いない。——高橋和巳氏によれば、「プロフェッショナルな知識人というものは専門領域いがいのところでは、その生活感情や社会感覚を意外とその時代の庶民の無自覚な部分と共有している」という。またさらに、「ただ学者の自負が専門業績から自己の地位に意識内部ですりかわるとき、旧套的感情までが権威あるもののごとく語られる」と述べている。ここで私のお願ひであるが、せめてこの旧套的感情を権威づけることなく、道学者的干渉主義を棄て、話を最後まで聞いていただきたいのである。

卒業までの4年間、かくのごとくほとんど連日の鯨飲と不規則な生活のため、卒業時には少なからず健康を害し、ひどく肝臓も乾いていた(trockene Leber)。それにも増して、酒場での借財が数万を越えていた。この借金を解剖学教室の助教授に返済していただいたばかりに、私は解剖学教室に入室しなくならなかった。いま私はなくなるといった。解剖学を選んだのは初心ではなかったといたかつたのである。私も早くも不惑の齡を迎えたが、老成したとは思っていない。それゆえ人生を語ることはさし控えるが、ただ素朴な反省として、私は医学とか、解剖学とか、将来の方向を意外と無自覚に決定してきたとだけ述べておく。それがいま、解剖学教育を天職と心得、「なぜ解剖学実習は実際の人屍体で行なわなければならないか」とか、「なぜ解剖学は医学にとって必要か」などと周知で明晰判明なこと柄を世の心ある医家に代って啓蒙して廻っている。運命のいたずらとでもいうのであろうか。(解剖学第一講座教授)

旭川医科大学談話会

本年1月に、本学教官の専門分野における研究の紹介を通して、本学の教官及び学生、それに地元の医師会及び大学間の相互理解・交流を深めるために、「旭川医科大学談話会」が発足し、現在まで、つぎのように5回にわたって開催された。

第1回、2月12日 司会 藤沢 仁(生化学講座)
演題及び演者

- 「いわゆる「私生子」の諸形態について」
笹森秀雄 (社会学)
- 「後根遠心性線維(脊髄副交感神経系)は存在するか?」
仲西忠之 (解剖学第一講座)

第2回、3月5日 司会 仲西忠之(解剖学第一講座)

- 「ウイルス増殖阻抑物質(インターフェロン)について」
東 匡伸 (細菌学講座)
- 「尿路の欠損をどう補うか」
黒田一秀 (泌尿器科学講座)

第3回、6月6日 司会 東 匡伸(細菌学講座)

- 「発生異常、染色体異常の成因-卵子の濾胞内過熟について」
美甘和哉 (生物学)
- 「小児腫瘍の話」
鮫島夏樹 (外科学第一講座)

第4回、7月4日 司会 鮫島夏樹 (外科学第一講座)

- 「ドイツ挽歌(晩歌)の100年-ロマン派から表現主義へ」
丸子基夫 (ドイツ語)
- 「胃ガン初基像」
下田晶久 (病理学第一講座)

第5回、9月5日 司会 下田晶久(病理学第一講座)

- 「H-メロミオシンAtpaseとATPアナログの相互作用」
内田倅喜(化学)
- 「Hypoxia」
小野寺壮吉(内科学第一講座)

次回以降の日程計画

第6回、10月3日(木) P. M. 5:30 旭医大講義室
司会 内田倅喜(化学)

演者 星野了介(物理学) 黒島晨汎(生理学第一講座)

第7回以降の日程(日時未定)

第7回、11月

司会 黒島晨汎(生理学第一講座)

演者 原田一典(歴史学) 藤沢 仁(生化学講座)

第8回、12月

司会 原田一典(歴史学)

演者 岩淵次郎(心理学) 松嶋少二(解剖学第二講座)

第9回、1月

司会 松嶋少二(解剖学第二講座)

演者 岡田雅勝(哲学) 石井兼央(内科学第二講座)

第10回、2月

司会 岡田雅勝(哲学)

演者 安田 博(数学) 清水哲也(産婦人科学講座)

第11回、3月

司会 清水哲也(産婦人科学講座)

演者 安孫子 保(薬理学講座) 森 茂美(生理学第二講座)

第12回、4月

司会 森 茂美(生理学第二講座)

演者 板倉克明(病理学第二講座)

吉岡 一(小児科学)

(世話人)



学則の改正とその解説

教育課程の改善のため、昭和49年4月1日付けをもって、学則の別表第1中数学Ⅲの履修年次を第3学年から第2学年に、並びに第25条(卒業の要件)及び別表第2の専門教育科目における授業科目の履修時間数を5104時間から4778時間にそれぞれ変更しました。

また、国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令(昭和49年文部省令第21号)の施行により、昭和49年6月7日付けをもって本学に副学長2名が置かれることになったことに伴い、学則の第45条(職員組織)にあらたに副学長を加えました。

なお、改正された学則の条項(関係分のみ)は次のとおりです。(庶務課)

(卒業の要件)

第25条 卒業の要件は、6年以上在学し、一般教育科目等について別表第1に定めるところにより、88単位以上を修得し、かつ、専門教育科目について別表第2に定めるところにより、4,778時間以上を履修することとする。

(職員組織)

第45条 本学に、学長、副学長、教授、助教授、講師、助手、事務職員、技術職員及び教務職員を置く。

別表第1

授業科目	第1学年	第2学年	第3学年	単位数
基礎教育科目 数学Ⅲ		2		2

別表第2

		講義 実習	の別	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	時間数	合計	備考	
専 門	解剖学	講義 実習		120 240	60				120 300	420	必修	
	生理学	講義 実習		30	120 90				150 90	240		
	生化学	講義 実習		44	76 60				120 60	180		
	薬理学	講義 実習			60	30 60	30		120 60	180		
	病理学	講義 実習			150 120				150 120	270		
	細菌学	講義 実習			120 60				120 60	180		
	衛生学	講義 実習			14	46 30			60 30	90		
	公衆衛生学	講義 実習				90 30			90 30	120		
	寄生虫学	講義 実習			60 30				60 30	90		
	法医学	講義 実習					60 30		60 30	90		
教 育	内科学	講義 実習				270	66 76	172	336 248	584		
	精神医学	講義 実習				90	30 24	56	90 80	170		
	小児科学	講義 実習				60	46 24	56	106 80	186		
	外科学	講義 実習				164	60 48	112	224 160	384		
	整形外科学	講義 実習				30	30 16	34	60 50	110		
	皮膚科学	講義 実習				30	30 16	34	60 50	110		
	泌尿器科学	講義 実習				30	30 16	34	60 50	110		
	眼科学	講義 実習				38	22 16	34	60 50	110		
	耳鼻咽喉科学	講義 実習				38	22 16	34	60 50	110		
	産婦人科学	講義 実習				52	60 26	62	112 88	200		
科 目	放射線医学	講義 実習				22	38 16	28	60 44	104		
	麻酔学	講義 実習				22	38 16	34	60 50	110		
	脳神経外科学	講義 実習				22	38 16	28	60 44	104		
	特別講義	生物科学 総合講義	講義				76			76	76	
		臨床実習 論	講義					210		210	210	
		総合講義	講義					60	180	240	240	
	計		講義 実習		194 240	600 420	1,080 120	870 356	180 718	2,924 1,854	4,778	
	合		計		434	1,020	1,200	1,226	898	4,778	4,778	

大学の施設整備計画について

昭和48年9月、戦後初の単科医科大学として設置された本学は、いま急ピッチで建設が進められております。

本学の施設整備計画を紹介するにあたって、各施設が、すでに完成した施設、建設途上の施設、机上プランの段階にある施設、とさまざまであって、詳細については完成次第本誌上に紹介することとし、今回は全体の概要に止めることとした。

敷地

敷地は南北に640m～750m、東西に340mのほぼ平坦な台形で、面積は約232,000㎡あります。

この土地は以前は田畑作地で、敷地内には目立った樹木は1本もなく、敷地造成にあたっては敷地利用を十分考え、有効的な空地の確保と、積極的な植樹、造園等を行ない、将来は医科大学にふさわしい環境を形成するような長期的展望に立って計画し、実施して行く予定です。

建物

校舎等建物面積等年次計画は別表のとおりであります。各建物の面積は学生数、講座数、診療科数、病床数等を基準にして決められ、本学の場合は学生数840各（学部学生600名、大学院生240名）、講座数30講座（基礎14講座、臨床16講座）、附属病院診療科数17、病床数600床、看護学校学生150名を基準として計画したものです。

建築及び設備の計画にあたっての基本方針は次の点を考慮しました。

建築計画の基本方針

- 1) 本学は教育・研究の場であるとともに、同一キャンパス内に附属病院を設置することから、地域社会との関連を重視し、閉鎖的なアプローチの仕方は避ける。
- 2) 各々異った規模で、異った用途に供する多数の建造物を建てることから、関連の密なものはできるだけ同一ブロックとし、これらの各種建物を有機的、かつ効果的に結びつける。
- 3) 附属病院をもつということから、特に防災計画に十

分な考慮をはらう。

- 4) 大気汚染、水質汚濁、騒音、悪臭等の公害現象を発生させないよう計画する。
- 5) 旭川地方は寒冷、多雪地帯であるから、これに十分対応できる施設とする。
- 6) 将来増築が考えられるものについては、十分な余地をとるよう計画する。

設備計画の基本方針

電気設備、暖房設備、給排水設備、通信設備、放送設備等は、本学の規模から推して膨大なものになるので、これを中央化し、管理運営にあたっては、コンピュータシステムによる中央監視制御方式を採用する。

現在使用している講義実習棟及び中央研究棟は、旭川市に医大設置が決定した昭和47年、補正予算に組込まれたものであるが、昨年の石油危機から派生した物不足、物価高騰の影響をまともに受け、大巾な工事の遅れのやむなきにいたったが、工事施工の担当機関である文部省管理局教育施設部札幌工事事務所を始め、関係機関の努力によって、かろうじて工期内に完成し、今年5月仮校舎から移転することができた次第です。

また講義実習棟に併設の体育館、福利厚生施設が8月末に完成し、現在内部の設備にとりかかっているので、整備次第使用できるようになります。

なお大学のキャンパス内では現在各所で工事が行なわれており、通学、通勤等、大変不便をかけておりますが、昭和51年には主たる建物の完成と、附属病院の開院という大目標に向って工事を進めております。この間は特に事故等にあわぬよう、日頃から十分ご注意くださいよう切望してやみません。

(施設課)



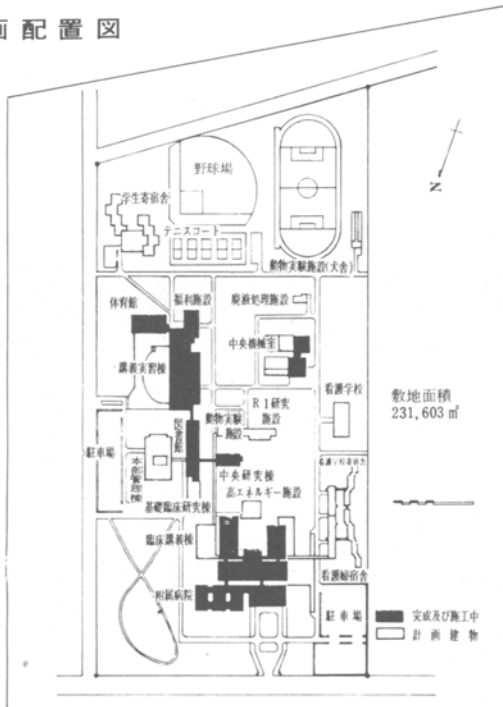
(国立旭川医科大学完成予想図)

校舎等建物面積等年次計画

建物名称	規模	構造	面積 ㎡	年次計画					備考
				47	48	49	50	51	
基礎臨床研究棟	基礎14 臨床16	S R 8	13,887			9,892	3,995		
中央研究棟		R 3	1,462						49,3完成
講義実習棟	学生定員 100	S R 4	6,689						◇
本部管理棟		R 2	1,280						
附属図書館		R 2	1,680						
講堂		R	750						
体育館		S 1	1,082						49,8完成
福利厚生施設		R 2	1,816						◇
学生寄宿舎	180取容	R	2,700						
附属病院	17診療科 600床	SR11-2	40,080			36,480	3,600		
特殊診療施設		R	1,700						
看護婦宿舎	200取容	R 5	4,260				3,750	510	
看護学校	学生定員 50	R 2	1,590						
看護学校寄宿舎	150取容	R 5	2,310						
中央機械室		S 1 R 2	2,243			1,613	630		第1次49,9完成
動物実験施設		R 4	4,200			1,200	3,000		
R 1 研究施設		R 2	900						
機器分折センター		R 3	1,250						

(昭和49年度現在の予定である)

計画配置図



福利厚生施設概要

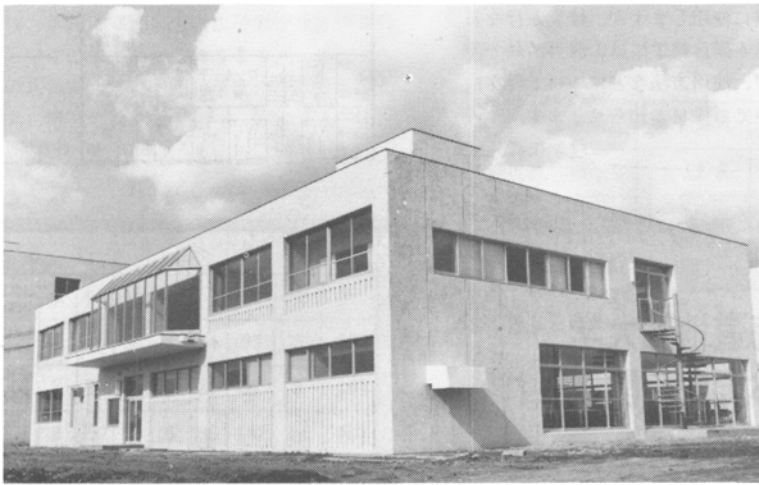
本学における教職員、学生のための福利厚生施設が完成しました。本年5月に神楽岡の新校舎へ移転しましたが、近辺には商店、食堂もなく非常に不便な環境の中で現在まで過ごして来ましたが、この施設が完成したことにより修学生活の環境が一步整備されたといえます。

この施設の総面積は1,816㎡あり、1階は食堂、売店、談話コーナー、理髪室、ロッカー置場等で2階はセミナー室(第1セミナー室から第6セミナー室)、保健室、和室、喫茶ホール等となっています。

しかし本学は現在建設途上であり、施設が不足しているためやむなく第3セミナー室と第4セミナー室を学生課、第5セミナー室を主に会議室に、第6セミナー室を図書館でそれぞれ当分の間使用することになります。

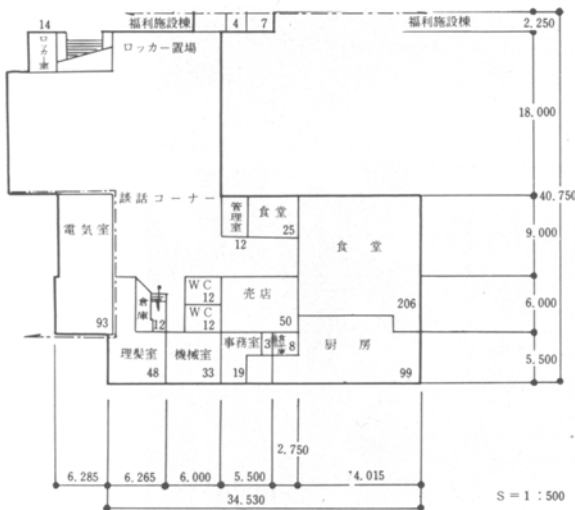
したがって諸君が使用できるセミナー室は、第1セミナー室および第2セミナー室のみとなりますが使用方法等について現在検討中であり、おってお知らせします。

(学生課)

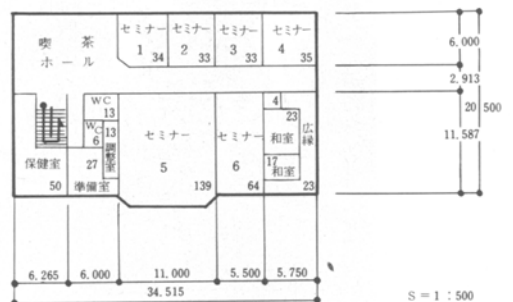


完成した福利厚生施設

福利施設棟 1階 1,128㎡



福利施設棟 2階 721㎡



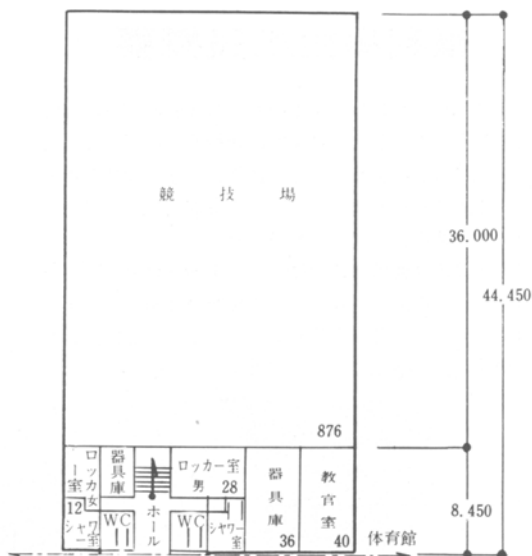
体育館概要

これまで体育授業や課外活動のための運動施設の確保が大きな悩みでありましたが、体育館の完成により解決されました。体育館の総面積は1,082㎡あり、そのうち競技面は876㎡で、それぞれバスケットコート3面（正式1面・補助2面）、バレーコート2面・バドミントンコート6面（シングルス2面・ダブルス4面）テニスコート1面、となっています。

なお附属施設としては、男女ロッカー室、男女シャワー室、器具庫、教官室などとなっています。

体育館は主に正課授業に使用しますが、授業が行なわれず空いている時や、第4講目終了後は、課外活動で使用することが出来ますが、使用方法などについて現在検討中であり、これについても後日お知らせします。

(学生課)



第21回 北海道地区大学 体育大会開催される

第21回地区体は、室蘭工業大学が当番校となり去る7月6日（土）から7月8日（月）まで3日間にわたり室蘭市内の各競技場で行なわれました。

いままでも運動施設がなかったため練習量が不足していたにもかかわらず、本学からはバレーボール、卓球、陸上競技、準硬式野球の各種目に参加しました。試合当日は天候が悪く陸上競技や準硬式野球は十分な実力を発揮

することが出来ず戦績も不十分な結果となりましたが、バレーボール、卓球は5位となり、また陸上競技の円盤投げ決勝では新ヶ江君2年A組が6位に入勝するなど善戦しました。

運動施設がなかったため、練習も充分出来ないままの初参加であったが、体育館が完成したことでもあり来年度の大会に期待がもたれます。

(学生課)



昭和48年度・49年度 入学者数調べ

昭和48年10月21・22日に第1回（昭和48年度）入学試験が行われ、本年3月には昭和49年度入学試験が行われる、という慌しい新入生受け入れ状況でしたが、このたびこれらの入学者数についてまとめてみました。

昭和48年度入試では、異例の時期であった為か、道外出身の入学者が半数以上を占めておりましたが続く昭和49年度入試では、前回とは逆に道内出身者が全体の3分の2を占めるという結果となっております。

また、女子の入学者数は、昭和48年度の5名から昭和49年度には9名に増えております。

（学生課）

区分 年度	道内			道外			合計		
	男	女	小計	男	女	小計	男	女	計
昭和48年度	45	1	46	50	4	54	95	5	100
昭和49年度	68	7	75	24	2	26	92	9	101
計		8	121	74	6	80	187	14	201



日本育英会および 都道府県奨学生数について

本学における日本育英会および都道府県の奨学生採用数は次のとおりであります。

なお、日本育英会奨学生1年2次の募集が11月にありますので希望する学生は掲示に注意して所定の期日までに必要書類（奨学生願書、市区町村発行の所得証明書等）を学生係へ提出して下さい。

（学生課）

(1) 日本育英会奨学生数

（昭和49年9月1日現在）

区分	第1学年	第2学年	計
特別貸与奨学生	13名	14名	27名
一般貸与奨学生	7	12	19
在籍数	102	95	197

(2) 都道府県奨学生数

（昭和49年9月1日現在）

名称	月額	奨学生数
長野県医学生修学資金	20,000円	1名
東京都公衆衛生修学資金	30,000円	1名
知内町奨学資金	6,000円	1名

学生団体設立状況について

本学では現在、体育系20団体、文化系5団体が設立され、活発に活動を行なっています。

体育系、文化系それぞれの団体名は次のとおりです。

なお、希望するサークルへ加入したい場合は、サークルの責任者へ申し込んで下さい。

（学生課）

学生団体設立届一覧

(体育系)

番号	団体名	顧問教官	責任者	会員数
1	サッカー	兼重 達男	近藤 福次	14
2	ラグビー	鮫島 夏樹	磯辺 雄二	16
3	硬式庭球	青木 藩	佐藤 仁志	30
4	準硬式野球	浜口 秀夫	落合 聖二	13
5	卓球	岩淵 次郎	松本 光博	20
6	バレーボール	倉橋 昌司	浜崎 卓	7
7	バドミントン	晴山 雅寛	楠 祐一	15
8	剣道	原田 一典	大橋 宏之	12
9	バスケットボール	平塚 寿章	福田 博	16
10	陸上競技	美甘 和哉	高木 勇	10
11	弓道	黒島 晨汎	近藤 啓史	15
12	空手	佐藤 利広	大西 健児	8
13	山岳	八幡 剛浩	石川 直	6
14	ワンダーフォーゲル	〃	衛藤 雅昭	9
15	柔道	松嶋 少二	石川 裕司	5
16	ボテビルディング	戸松 良一	豊川 好男	10
17	ゴルフ	原田 一典	岡本 洋	9
18	キックボクシング	内田 倭喜	出崎 真	11
19	徒歩旅行の会	笹森 秀雄	大河内博雄	22
20	スキー	加地 隆	八代 均	10

(文化系)

番号	団体名	顧問教官名	責任者	会員数
1	写真	星野 了介	齊藤 達也	8
2	映画研究会	名和橙黄雄	茜谷 敏雄	6
3	文芸	岡田 雅勝	安藤 政克	15
4	漫画創作研究会	笹森 秀雄	藤本 武利	5
5	語学研究会	戸松 良一	別府 良男	20

(49. 7. 20現在)

貸出用具一覧

品目	数量
テント(3季用)	10
シュラフ(3季用)	35
準硬式野球道具一式(審判用も含む)	2
剣道具一式	10
スキー	10

昭和49年度授業料(後期分)の免除申請 および延・分納願について

諸君の中で、次の各事項に該当しかつ授業料の免除および延・分納を希望する者は、学生課学生係で必要書類を受取り9月30日(月)までに遅れないよう提出してください。なお申請した人は学生係から連絡のあるまで授業料の納入を見合わせて下さい。

- (1) 経済的理由により、授業料の納付が困難でありかつ学業優秀と認められる場合
- (2) 学生又は当該学生の学資を主として負担している者が、風水害等の災害を受け授業料の納付が困難であると認められる場合等

必要書類

授業料免除申請の場合

1. 授業料免除申請書
2. 家庭調査
3. 収入証明書その他

授業料延・分納願の場合

1. 授業料延・分納願
2. 理由書
3. 収入証明書、その他

(学生課)

編集後記

神楽岡にいまつぎつぎと本学の建物工事が進められています。広報誌の題名もこの地にちなんで「かぐらおか」としました。

神楽岡はもとアイヌ語で「ヘッチエウシ」といったところで「この丘は昔その上に祭場があり、お祭の際は部落の人々がそこへ集って、シャーマンを中心にして原始的な舞踊劇を演じた場所」(知里著「ユウカラの人々とその生活」)でありました。明治以降、開拓移民が旭川に移住したとき、このアイヌ語の意味を日本語に置き代えて名付けたものと思われます。あえて漢字にしなかったのもこのためです。

ようやく創刊にごぎつきました。大学の創設についで広報誌の発刊。編集のまづきはお目こぼし願います。

お忙しい中から原稿をおよせいただいた方々に深く感謝いたします。(高木)

課外活動用具の貸出について

本学では学生諸君の課外活動のために備付物品を学生課で貸出し、諸君の課外活動を側面から援助しています。これらの用具は現在のところ下記のとおりであります。これらは充実され諸君の期待に添えることと思ひます。大いに利用して有意義な学生生活を過ごして下さい。

なお、課外活動用具の貸出基準等については現在検討中でありますので、できしだい諸君にお知らせします。

(学生課)